○尊經閣叢刊赤穗義人錄

育德財團

赤穗義人錄は元祿十五年の赤穗浪士の復讐に就いて、當時是非の議甲論乙駁の間にあり、近世の碩儒室鳩巢が、その義舉たる事を唱道せる述作である。而して本書は實に前田侯爵家所藏の鳩巢草稿本を複製せるものである。

室鳩巢は年十四にして前田侯に召され、その後京都遊學を終へて貞享三年加賀に歸り、正德元年新井白石の推擧に依りて幕府の儒者に任ずる迄、儒を以て前田家に仕へたのであるが、赤穗義人錄は正にその間、元祿十六年十月の撰に係る。その內容は元祿十四年勅使下向の事より同十六年二月諸士切腹の顚末を記し、更に四十六士の傳、並に附載として寺坂吉右衞門信行及び節母義僕の事蹟に至る迄、簡潔なる叙述の間に修飾せざる史實を傳ふるものと言ふべきである。また更に本書にありては鳩巢草稿本の複製なるが故に改竄是正せる過程を偲び得ると共に、彼が拂へる苦心經營の樣を窺知し得る點にその意義大なるものがあるのである。（解說附和本二册帙入）

（以上時野谷）

○稻荷神社史料　第五輯

伏見の稱荷神社に於ては夙くより神社史料の蒐集整理に力を致されてゐたが、此度その神階及社格、並に社領に關する部分がまづ公にせらるゝに至つた。本史料の編纂は辻善之助博士監修の下に始め史料編纂所竹島寬氏之に當り、その他に轉ぜらるゝに及んで同所小島鉦作氏專らその後を繼ぎ之を完成せられしもの、その最初に第五輯の出版せらるゝに至つたのはもとより編纂事業進捗上の事情によることであらうが、特に一般國史の問題にも關係するところの多いこの一編のまづ完成したことは、われ〳〵として殊に喜びとするところである。

就いて見るに神階及社格に關する條項は全七三六頁の中僅々六六頁に過ぎず、他は悉く社領に關するものであるが、本編は更に封戶、莊園、神田、朱印地の四項に分たれ、各項に就て逐一編年的に關係史料の全文が揭げられてゐる。挿入の圖版十三葉、別に卷末に舊稻荷村附近之圖

一葉を添へて、土地關係の文書の中に屢出する小字その他地理的稱呼の檢索に備へてゐる。たゞ通覽して稍さびしく感ぜられることは、當社の自ら傳世し來つた史料の甚だ乏しいことで、就中中世に關してはその感が一層深い。蓋し應仁亂に於て悉く兵火にかゝるものと言はれ、今に於て他に索めらるべくもないが、本冊中天正十年檢地注文以前のものは僅に建武元年九月四日の吉田定房、日野資朝等の署名ある雜訴決斷所牒の外、精々數通を數ふるのみである。幸にして東寺百合文書、東福寺文書等の如きあつて或程度その缺は補ふことを得てゐるが、なほ莊園等に就ては唯その莊名とその在存とを知るのみでその社領としての由來變遷等を徵しうべきもの一箇所もないのは、恐らく編者に於ても最も遺憾とせられたところに相違ない。併しながら近世の部分に於ては流石に社傳の史料も豐富に、大西、羽倉等舊社家所藏の文書は多く本書によつて始めて世に紹介せらるゝものであらうと思ふ。

この史料は本輯の前後更に祭神、鎭座及社地、社殿及攝末社、祭祀、祠官及氏子、奉幣及祈請、行幸啓及御幸、崇敬、修佛事及社僧、稻荷山、稻荷門前町、稻荷信仰、稻荷神社の分布、年表及索引等の諸編を以て完結するもの、その規模の廣大にして體裁の整然たること、同種の編纂物に於ては、唯石清水八幡宮のそれを除き殆ど他に比類を見ないものであらう。尙全體として組版の細心にして周到なる、校正の嚴密にして確實なる共にまた間然するところがない。（稻荷神社々務所發行、非賣）（柴田）